

江戸語における形容詞型条件表現の変化

——助動詞「ない」との関連——

奥村彰悟

キーワード：江戸語、形容詞、仮定条件表現、

打消の助動詞

要旨

一八五〇年以前、江戸語に見られる形容詞の仮定条件表現には、「くは」「ければ」が並用されていた。両形のうち、「くは」となる形容詞がバラエティに富んでいたのに対して、「ければ」となる形容詞は「ない」「よい」が中心であった。一八五〇年以降、「くは」が衰退し、「ければ」が盛んとなることから、一八五〇年頃を境に、「くは」「ければ」並用から「ければ」専用へと変化したことが分かる。これは、打消の助動詞「ない」の仮定条件表現が「ないければ」から「なければ」へと移っていった時期と文献的に一致する。

形容詞の仮定条件表現が「ければ」専用となることで、形容詞の仮定形「ければ」として、現代日本語へと続く形容詞の活用体系が再構成される。このことは、江戸末期から明治初期にかけて活用体系の整備をしつつあった打消の助動詞「ない」にも影響を与え、仮定条件表現を「ないければ」から「なければ」へと変化させる要因の一つとなった。

一 はじめに

条件表現は、日本語の歴史において大きな変化を遂げて現在に至っている。例えば、動詞の場合、仮定条件を表す表現が、「未然形十バ」から「已然形十バ」へと変化した^{注1}が、この仮定条件表現は、数々の先行研究^{注2}において、江戸語以降に変化したことが明らかにされている。確かに、江戸語に見られる、形態としての「已然形十バ」は、仮定条件を表すことが多い。逆をいえば、動詞の場合、「未然形十バ」は「あらば」「言わば」「申さば」など限られたもの^{注3}を除くと、仮定条件を表すものはあまりない。

一方、形容詞の場合、江戸語の資料には、「くは」^{注4}の形による仮定条件が少なからず見られる。そこで本稿では、江戸後期から明治初期の資料を用いて、形容詞の仮定条件としての「くは」がいづ頃、何故衰退したのかについて考察し、さらに「くは」が仮定条件表現の中心となっていた過程を見ていく。

また、江戸語では、打消の助動詞「ない」の仮定条件表現として「なければ」が見られるが、この「なければ」は、打消の助動詞「ない」が形容詞型に活用を整備する過程で、「なければ」へと変化する^{注5}。本稿でとりあげる形容詞の条件表現の変化が、

この「ないければ」から「なければ」への変化の要因の一つであることも併せて触れることにする。

二 先行研究

日本語における条件表現史の研究は数多く見られるものの、その多くは中世から近世初期の資料を用いたものが多い。また、条件表現全般における研究では動詞を中心とした研究が多く、このため、江戸語を資料としたもの、かつ、形容詞や形容詞型の助動詞に焦点を絞った研究はあまり見あたらない。ここでは、大まかな指摘のあるものを取り上げる。松村(一九五七)^{注5)}は、

江戸語の形容詞の未然形としては、いちおう「―く」の形が考えられるが、この形は、助詞「ば」が付いて仮定の条件を示すに用いられる。

と述べ、その用例を挙げているが、それに加えて、

このように、「―くは」または「―くば」の形で仮定の条件を示すこともあったのであるが、一方では、仮定形「―けれ」に「ば」を付けて、仮定の条件を示すことも、江戸語では行われていた。そして、後期の江戸語としては「―けれ」に「ば」を付けて言い表わすほうが多く行われるようになってきている。

と述べている。

また、小松(一九八二)^{注6)}では、江戸語における形容詞の仮定形の例を出して、

形容詞の場合は、動詞と違って右のように仮定形の形成が遅れている。それは形容詞の仮定表現が恋シクハのような――クハの形で行われていたからだろう。

と指摘している。

なお、「―クハ」から「―クバ」への変化については、吉川(一九七二)で説明されている^{注7)}。それによると、接続助詞「ば」への類推が「―クバ」「ズバ」という形へ進めたとし、次のように述べている。

「リヤ」「ニヤ」等が「レバ」「ネバ」等であるのに準じて、「カ」「ザ」が「クバ」「ズバ」であるという類推の発生である。しかも旧已然形の仮定形化もその端緒にあり、「ば」の意味も漸く仮定条件の表示に局限されようとしていた。仮定法の「クハ」「ズハ」はかような環境下に、単なる音韻論的現象ではなしに、「クバ」「ズバ」の姿に移行していったものではなからうか。

すなわち、「―カア」「ザア」という融合形の存在が「―クハ」「ズハ」から「―クバ」「ズバ」への変化を促したというのである。

この考えは決して否定できないものである。ただ、吉川の説は、形態的な面における「―クハ」「ズハ」から「―クバ」「ズバ」への変化を説明しているもので、仮定条件表現が「―くは」から「―け

れば」へと、どのように移っていったのかについては「旧已然形の仮定形化」と述べるにとどまっている。本稿では「くは」から「ければ」への変化について扱うことにし、「くは」と「くば」とは区別せず「くは」としてまとめて扱う。ただし、用例を示す場合は、底本の表記通りに「くは」と「くば」で表記する。

このように、江戸語において、形容詞の仮定条件表現には「くは」と「ければ」の両形が存在したことが先行研究で明らかにされている^{注8)}。しかし、小松（一九八二）の指摘では、江戸語における形容詞の仮定表現が依然として「くは」で行われたとある。

打消の助動詞を用いた条件表現に関しては、奥村（一九九六）で江戸語において「ねば」「ずば（ずば）」「ないければ」には、それぞれ用法に差が見られるということを指摘し、同（一九九七）では、「ないければ」から「なければ」へと移行した時期について考察した。以下では、「くは」「ければ」並用から「ければ」専用への移行が、「ないければ」から「なければ」への変化に時期的に關係していることを見ていく。

三 調査

本稿では、江戸後期の滑稽本・人情本、および明治初期の滑稽本において、形容詞の条件表現、および、打消の助動詞「ない」に接続助詞「ば」が続く形である「ないければ」「なければ」の用例数を調査した^{注9)}。表1は形容詞における調査結果であり、表2は打消の助動詞「ない」における調査結果である^{注10)}。

表1を見ると、小松（一九八二）に指摘されていたように、江戸

語では、依然として「くは」が用いられていたことが確認できる。この「くは」の勢力が弱まるのは、『七偏人』以降であることがうかがえる。

さらに『七偏人』以降、仮定条件は「ければ」によって表されるが多くなったとみられる。奥村（一九九七）で述べているように、「ないければ」から「なければ」へと変化したのも『七偏人』以降であり、「くは」の衰退と、「ないければ」から「なければ」への変化が同時期であることが表1・表2から見てとれる。このことは、二つの変化に關係があることをうかがわせる。以下、この点について詳しく見てみる。

表1 注9

	くは	ければ	ならば(ば)
浮世風呂	12	8	4
四十八癖	6	5	0
浮世床	3	5	2
八笑人	8	6	0
春色梅児誉美	6	7	1
春色辰巳園	7	2	0
春色梅美婦襦	4	1	0
七偏人	3	5	0
春色江戸紫	2	11	0
西洋道中膝栗毛	1	14	0
安愚楽鍋	2	6	0
合計	54	70	7

表2 注10

	なければ	ないければ	ないならば
浮世風呂	0	5	3
四十八癖	0	2	0
浮世床	0	6	1
八笑人	0	5	0
春色梅児誉美	1	5	0
春色辰巳園	1	7	0
春色梅美婦襦	1	8	1
七偏人	9	2	1
春色江戸紫	11	0	0
西洋道中膝栗毛	8	1	0
安愚楽鍋	2	1	0
合計	33	42	6

四 形容詞

四・一 「くは」

表1によると、『浮世風呂』から『春色梅美婦禰』までは「くは」の用例が多く、「くれば」と並用されているように見える。以下、例を見てみる。

- 1 「こりやア前裁の籠にあつたのだから銭は出さねへ。ついぞ見たことはねへが、奇しい茸だから遣う思つて持て来やした。おめへ欲かア上やう」(『浮世風呂』商人↓けち兵衛)
- 2 「おのしがやうな物あきをする者は、万一に飽すほくて、何を一ツとげた事がねへ。くやしきは石垣へあたまを打付て、死でもしましたが能(『浮世風呂』五十余のかゝさま↓太吉)
- 3 「湯が熱くは水をうめやアがつて、うぬ又、すべりやアがらねへやうに、そろくとながしやアがれ」(『浮世風呂』お丸↓ともだちの下女)
- 4 「不でなくば為たのだ」(『浮世床』鬻五郎↓どんぼう)
- 5 「マツサ、だまつて聞ツし。跡でもしわるくは、なんとでもいふがい」(『八笑人』眼七↓出目吉)
- 6 「早速ながらお由さん、御遠慮なさるお方もなくば、チト込入た私がおはなし、亦おきゝもうすこともあり」(『春色梅児誉美』内儀↓お由)
- 7 「イエ今申す通りの訳で、日光責に合つて参りましたから、お前さん方のお仕度が宜くはそろくお出かけ被成まし」(『春色梅美婦禰』房吉↓佐助)

8 「そりやア一々道理だが、先刻から言ふとふり、這方に知らねへ事だから詮方がねへ。夫ともに疑はしくは、お園を呼んで明りを立て見せやうか」(『春色梅美婦禰』判次郎↓此花)

『春色梅美婦禰』以前における「くは」に用いられている形容詞は、例4や例6のような「ない」、例7のような「よい」が多く見られたものの、他にも例文に見られるように、「わるい」「あつち」「ほしい」「くやしい」「うたがわしい」など、さまざまな形容詞によつても「くは」となる例が見られた。「くは」に用いられる形容詞はバラエティに富んでいることが分かり、この時期における「くは」の仮定条件表現は依然として活発に用いられているといえる。

なお、「くは」は、話し手の位相によつて「クハ」「クバ」「カア」に分かれる。例えば、例1では、江戸者の商人によつて「カア」の形で用いられている。この人物は、「ない」が「ねへ」と連母音が長音化しており、江戸町人の言葉遣いをする人物として造形されていることが分かる。このことから、「カア」は江戸町人の言葉遣いをする人物によつて用いられていたことがうかがえる。さらに、例2・3から、江戸町人の言葉遣いをする人物によつて、例7から遊女によつて「クハ」が用いられていることがうかがえる。

また、例6では内儀によつて「クバ」が用いられている。これらの人物は、「もうすこともあり」と、堅い言葉遣いをしており、江戸町人の言葉遣いをする人物とは異なる位相の人物である。このことから、「クバ」の方は江戸町人の言葉遣いをしていない人

物によって用いられていたことがうかがえる。ただ、例4では贅五郎が「クバ」を用いており、この人物は『浮世床』の主人公でもあり、江戸町人の言葉遣いをする人物として造形されている。江戸町人であっても、「クバ」を用いたこともあったのであろう。このように、『春色梅美婦禰』以前には、「くは」の用例が多く見られるが、大まかに分けると、江戸町人の言葉遣いをする人物や遊女は「カア」「クハ」を、江戸町人の言葉遣いをしていない人物は「クバ」を用いている。

しかし、『七偏人』や『西洋道中膝栗毛』『安愚楽鍋』の頃になると、「くは」の勢力は衰えてくる。

9 「彼様逃道を取ざれば蟻の這出る所もねへ、命が欲しくば衣ものを脱」（『七偏人』茶目吉↓喜次郎・飛八）

10 「それは何よりお安い御用じやアありますが、ホンニまだ仮住居でございますからむさくるとも宜敷くば御遠慮なく」（『春色江戸紫』惣次郎↓女）

11 「さむかア、そこらで一杯やらかそう」（『西洋道中膝栗毛』弥次郎兵衛↓北八）

12 「あはよくば藝奴の尻尾を持上て枕金の小釣をとるかさもなくば人力車の二挺で吉原へでも引張つて知己の茶屋へ送り込んで伊勢六の五階見物とか（以下略）」（『安愚楽鍋』藪医生）

『七偏人』以降でも、「くは」に用いられている形容詞は、「ない」「よい」「ほしい」「さむい」「よろしい」のように、やや種類が見られる。しかし、『七偏人』以降における「くは」は、「ク

バ」「カア」は見られるものの、「クハ」は見られなかった。例えば、例9は、江戸者の茶目吉が脅しをかけて、すごんでいる場面であるが、ここでは、茶目吉は「クバ」を用いている。

例11の場合は弥次郎兵衛によって用いられているが、この人物は例11に見られるように、「一杯」を「いっぺゑ」となるように、連母音が長音化しており、江戸町人の言葉遣いを明治期に入っても残している人物として造形されている。このことは、奥村（一九九七）で既に指摘した^{注13}が、この弥次郎兵衛は「ないければ」も用いており、例11の「さむかア」という「くは」の融合形の使用も、こうした江戸町人の言葉の名残として使用したものであろう。ただし、後に見るように、弥次郎兵衛は「くれば」も用いている。

さらに、例12の藪医生はいい加減な医者であるものの医者であることを表に出し、江戸町人の言葉遣いをしていない人物である^{注14}。つまり、作者である仮名垣魯文は、藪医生が用いるわざとらしい堅い言葉遣いとして、「くは」を選択したのであろう。このことは、明治初期になっても「くは」が「クバ」の形で、教養のある人物によって、衰退しながらも用いられることがあったことをうかがわせる。

四・二 「くれば」

『春色梅美婦禰』以前にも、「くれば」を用いた仮定条件表現が見られた。

13 「高けりやアよしなせへ。無利には売ねへ」（『浮世風呂』商人↓けち兵衛）

14 「よしや姑御がむづかしくても、御夫婦中さへよければ納り
ます」（『浮世風呂』辰↓巳）

15 「そつちの子こそ常不断、おらが孫をなかせてよこすは。コ
レ、鳴込で能けりやア、こつちから鳴こむのだよ」（『浮世風
呂』泣かせた娘のばアさま↓した）

16 「昔の事を見て来たやうに講釈をするのだから、あれは余程
な学者でなければ出来ませうまいナ」（『四十八癖』）

17 「藤さん、それほど憎けりやアぶつとも殺ともおしな」（『春
色梅児誉美』米八↓藤兵衛）

18 「どうで男の名聞だから、色も恋もするほどの男でなけりや
ア、私もまた惚て苦勞はしないから、まんざら止るといふや
うな、野暮はいふ気はないけれど（以下略）」（『春色辰巳園』
米八↓仇吉）

例に見られるように、「一ければ」となる形容詞は、「ない」と
「よい」（32例中29例）が中心であり、このほかには「たかい」「に
くい」「おそい」の例が一例ずつ見られる程度であった。この点で
「一くは」に比べて、この時期の「一ければ」は「ない」「よい」
に例が偏る傾向が強く見られる。さらに、例1と例13に見るよう
に、同一人物が「一くは」と「一ければ」を用いていることから、
江戸町人の言葉遣いをする人物の間では「一くは」「一ければ」両
形が並用されていたことがわかる。

なお、『春色梅美婦襦』以前の作品である『春色梅児誉美』に二
例、『七偏人』以降の作品である『春色江戸紫』に一例とわずかで
はあるが、「一ければ」による確定条件の例が見られたことが注意

される。

19 「覚えもしねへ宝の金のと、畠山はさておいて、鎌倉御所か
ら呼に來ても、行たくなけりやア行ねへ」（『春色梅児誉美』
五四郎↓丹次郎）

20 「今おまへが寝言に言た丹さんとは、中の郷に当時日影の身
のうへで、幽にくらす侘居、それも女の仕送りではかない容
子、その中でまた此頃はまとまった金がなければ、畠山の宝
の一件でむづかしいわけになるとの事だそうだ」（『春色梅児
誉美』お由↓お長）

21 「眞に此方に子のなければ、引取つて育てませうといふと、
父上は喜んで、思ひ置く事はればかり、何事小児が成長を宜
敷く頼み奉る（以下略）」（『春色江戸紫』貞↓惣次郎）

これらの例から、江戸末のこの時期まで依然として「一ければ」
による確定条件表現があったことがわかる。ただし、確定条件の
「一ければ」を用いていた人物は、中流階層以上の人物ないしは遊
女として造形されており、江戸町人とは位相が異なるし、用例は
いずれも「なければ」であった。これらのことから、確定条件の
「一ければ」は、この時期の形容詞「一ければ」の用法の中心では
ないことがうかがえる。

表1によると、『七偏人』以降になると、「一くは」の勢力が衰
え、「一ければ」の勢力が強くなる。

22 「彼處が白ければお公家さままだア」（『七偏人』虚呂松↓下太郎）

23 「坊主が憎けりやア袈裟迄だはネ」（『春色江戸紫』智清↓惣次郎）

24 「夫れとも人に見つかツテ外聞がわるきやア、最うく一所に〇〇へ」（『春色江戸紫』惣次郎↓おくみ）

25 へん、腐癩た鶏卵じやアあるめへし、きみのわりいりくつはねへ。よければ、すぐにをしだすぜ」（『西洋道中膝栗毛』弥次郎兵衛↓お汲）

26 「ライ、供公、そんなにほしきやア、北さんのイ尻え袋でもあてがつておかツせへ」（『西洋道中膝栗毛』通次郎↓供七）

27 「なんでも北里のお茶屋の妻君かさもなけりやア山谷堀あたるの船宿の女房かしらん堀じやア見かけねへかほだがどうもわからねへ」（『安愚楽鍋』野幫間）

「よければ」に用いられている形容詞は、例のように、「ない」「よい」「にくい」「しろい」「わるい」「ほしい」などが見られる。

『七偏人』以降の「よければ」には、依然として「ない」が多く見られるものの、その用例には「くは」が衰退し、「よければ」が盛んになってきた様子が見える。例えば、「わるい」は、『春色梅美婦禰』以前には例5のように「くは」に見られるが、『七偏人』以降では例24のように「よければ」に見られた^{注15}。

ここまで「くは」「よければ」両形の用例を検討してきたが、『春色梅美婦禰』以前では、「くは」となる形容詞は「ない」「よい」「あつい」「わるい」などバラエティに富んでいた。すなわち、さまざまな形容詞が「くは」となるのであり、この時期まで「くは」が依然として活発に用いられていたといつてよいだろう。ま

た、「くは」は、江戸町人の言葉遣いをする人物では「くは」が、町人以外の堅い言い回しをする人物では「くは」が用いられていた。このように、さまざまな階層で「くは」が用いられていたことも、「くは」が依然として活発に用いられていたことのあらわれであろう。

それに対して、『春色梅美婦禰』以前の「よければ」は「ない」「よい」中心に用いられており、他には、「たかい」「にくい」「おそい」に一例ずつ見られた程度で、用いられている形容詞がやや限られている。このことから、『春色梅美婦禰』以前においては「よければ」は、「ない」「よい」を中心に勢力を拡大しつつあったものの、未だ「くは」よりも強い勢力を持つことができていなかったことがうかがえるのである。このため、『春色梅美婦禰』以前では「くは」と「よければ」は並用されていたのであろう。

なお、『春色梅美婦禰』以前の「よければ」には未だ確定条件としての用法も見られる。しかし、確定条件表現の「よければ」となる形容詞は「ない」だけであり、また、階層も限られて用いられているに過ぎない。このことから、既に確定条件表現の「よければ」は「よければ」の中心的な用法ではなかったといえる。

そして、『七偏人』以降になると、「くは」となる形容詞にはやや種類が見られるものの用例数は減っており、位相の面でも、堅い言い回しをする人物によって「くは」が用いられたり、江戸町人の言葉遣いを残す人物によって「くは」が用いられるに過ぎず、衰退していった様子が見える。一方、「よければ」は、「わるい」「ほしい」のように、『春色梅美婦禰』以前には「くは」として用いられていた形容詞が、『七偏人』以降には「よければ」

として用いられている例が見られるなど、『七偏人』以降「ない」「よい」の他にも「一ければ」となる形容詞が増えていった様子を示している。すなわち、『七偏人』以降、「一ければ」の勢力が「一くは」よりも拡大していったのである。このような、「一ければ」による勢力の拡大は、さらに「一くは」の衰退を促したものと考えられる。

このように、形容詞の仮定条件表現は、『春色梅美婦禰』以前では、「一くは」と「一ければ」が並用されていたが、『七偏人』以降になると、「一くは」が衰退し、「一ければ」が専用される。形容詞の仮定条件表現が「一ければ」専用となることで、形容詞の仮定形としての「一けれ」が、あらためて位置づけられるのである。

四・三 「一なら」

形容詞型の条件表現として「一なら」の形による仮定条件も見られた。「一なら」は全体的に用例数が少ない。『浮世風呂』には四例見られた程度である。「一なら」による仮定条件は次のような例であった。

28 「但し、湯がかゝつて熱なら水のねを掛けてうめてやらうか」(『浮世風呂』した↓そばの人)

『浮世風呂』では、他に「ないなら」「あたじけねへなら」「勿体ねへなら」が見られる。『浮世床』では、「ないなら」「短いなら」が見られる。また、「一なら」を用いているのは例28のように江戸町人の言葉遣いをする人物のほか、『浮世風呂』『浮世床』ともに

上方者によって「一なら」が用いられている例が見られた。しかし、本稿の調査では形容詞における「一なら」の例は少なく、この時期を通じて、その存在が認められることが指摘できるようにすぎない。なお、『浮世風呂』には、動詞における「一なら」による仮定条件表現が23例見られる。「一なら」は動詞が中心となる用法のようである。

五 打消の助動詞「ない」

五・一 「ないければ」と「なければ」

三節で指摘したように、形容詞型の仮定条件が「一くは」「一ければ」並用から「一ければ」専用へと移った頃と同じ時期に、打消の助動詞「ない」の条件表現が「ないければ」から「なければ」へと変化している。

奥村(一九九七)でも「ないければ」から「なければ」への変化の時期とその要因について述べたが、本稿の調査では、表2に見るように、『春色梅美婦禰』以前は例29、31のような「ないければ」が優勢であり、例32、33のような「なければ」は『春色梅児誉美』『春色辰巳園』『春色梅美婦禰』に一例ずつ見られたにすぎない。

29 「御新造さまのお供ちやア気がつまつて否だ。此お子さまは嫌なり、行ねへきやア其氣で見たくもねへが、行けば見る気になるから、此お子さんが僥末になるはな」(『浮世床』うば↓鬢五郎)

30 「実は此方へ遊びに来ただけれど、今思ひ出すと今日は巳

の日だ。是非洲崎へ参詣ねへければならねへ」（『春色梅児誉美』藤兵衛↓お由・蝶吉）

31 「長い間世話になつたり、久しく思ひおもはれた人を、欲ゆゑ突出して、ふり向て見るもいやだといふやうにせへしねへければ、始終出世も出来るもんだと、異見を言てくれた人が有たツけ」（『春色辰巳園』米八↓房）

32 「イヤおそくなつたから今日はよしねへ。余程いそがなければならねへ」（『春色梅児誉美』藤兵衛↓お由・蝶吉）

33 「お前が其気にお成だと、私も同じ様に仕なければならぬ義理だはネ」（『春色梅美婦禰』お房↓お兼）

「ないければ」は、例29に見られるように、江戸町人の言葉遣いをする人物によつて用いられている。このほかにも、例30・31のように、遊女や中流階層以上の人物によつても用いられている。ここにも「ないければ」が広く用いられていたことがうかがえる。その一方、「なければ」を使用している例が見え始めるが、その例は、例32・33のように遊女や中流階層以上の人物によつて用いられており、江戸町人の言葉遣いをする人物には見られない。

しかし、『七偏人』以降になると、例34のような「ないければ」は勢力を弱め、例35・36のような「なければ」の勢力が強くなる。

34 「此方が勝手を知らねへから、こんな頓間なことはしたが、

それがいやで、出やアがらねへけりやア、場代は出さねへから、五分とたんだア」（『西洋道中膝栗毛』弥次郎兵衛↓通次郎）

35 「やらかした様なものなら、衣類のつまが濡て居なけりやア

ならねへはずだが、何とも無ぢやアねへか」（『七偏人』下太郎↓虚呂松）

36 「(前略)医業で生活をたてるのは洋薬の名目も口元だけはおぼへなければならんが(後略)」（『安愚楽鍋』藪医生）

『七偏人』以降の「ないければ」は、例34のように、江戸町人の言葉遣いを残す人物によつて用いられている。一方、「なければ」は、例35のように江戸町人の言葉遣いをする人物によつても、例36のように江戸町人の言葉遣いをしていない人物によつても用いられている。

表1、表2に見るように、形容詞型の仮定条件表現において、「くは」が衰退して「ければ」専用へと移った時期と、「ないければ」から「なければ」へと変化した時期は、ほぼ同じ時期であり、その時期は、『七偏人』の頃、つまり一八五〇年頃である。四節で、『七偏人』以降に、形容詞の仮定条件表現が「くは」「ければ」並用から「ければ」専用へとなることを具体的な例から指摘したが、これは、形容詞の活用の中で「ければ」が仮定形として再整備されたことを意味している。一方、坂梨(一九七三・一九九五)でも指摘されているように、打消の助動詞「ない」は、同じ江戸末期に、徐々に形容詞型の活用体系を整備しつつあった。おそらく仮定形「なければ」については、『七偏人』の時期に形容詞の仮定形「ければ」の再整備が影響を与えて、「ないければ」に変えて「なければ」という形を定着させはじめたのであろう。

五・二 「ないなら」

この時期、打消の助動詞「ない」の場合も、例37のように「ならば」、例38のように「なら」がついて仮定条件を表す例が見られた。

37 「お京さん、淋しからふが能留守をしてお呉よ。夫とも淋しくつて行なひならば、私と同伴に本宅へお出か」(『春色梅美婦禰』峯次郎↓京)

38 「エ、イ人の氣も知らねへで、むだ口所かコウく其處らに、誰も見えねへなら、お前はそ草鞋と大小を持って逃てくんな」(『七偏人』茶目吉↓岐助)

このほかに、『浮世風呂』『浮世床』で、打消の助動詞「ない」+「なら」が見られた。また、打消の助動詞「ない」+「なら」は、例37のように、中流階層以上の人物によって用いられたり、例38のように江戸町人の言葉遣いをする人物によって用いられていた。ほかにも、上方者によって用いられている例も見られた。なお、既に指摘したように、『浮世風呂』では、動詞における「なら」が23例見られるが、形容詞の場合と同様、本稿における調査では、打消の助動詞「ない」+「なら」も全体では用例数が少なく、その存在が見られることを指摘できるにすぎない。

六 「ないければ」への影響

以上、形容詞と打消の助動詞「ない」について仮定条件表現の変化を見てきた。形容詞の場合は「―くは」「―ければ」並用から

「―ければ」専用への変化であり、打消の助動詞「ない」の場合には「ないければ」から「なければ」への変化である。

形容詞の仮定条件表現が「―くは」と「―ければ」との並用ではなく、「―ければ」専用になったことで、形容詞の活用語尾、「―ければ」は形容詞の仮定形として確立し、現代日本語へと続いていく形容詞の活用体系が再整備されたといえよう。この形容詞における活用体系の再整備が、打消の助動詞「ない」にも影響していく。すなわち、一八五〇年頃、徐々に形容詞型の活用体系を整備しつつあった打消の助動詞「ない」は、その仮定条件表現にも形容詞型の活用体系を取り入れ、「ないければ」から「なければ」へと変化させたのではないか。また、本稿の調査では、『浮世風呂』以降の作品には、「近いければ」のような、形容詞の連体形に「ければ」が付く形で仮定条件を表すものが見られなかった^{注16}。このような、仮定条件表現としての「形容詞の連体形+ければ」が存在しなかったことは、打消の助動詞「ない」が形容詞型の活用体系を整備していく上で、打消の助動詞「ない」の仮定条件表現である「ないければ」の形を保持し続ける基盤がないことである。このため、「ないければ」は、形容詞に倣って活用体系を整備していく打消の助動詞「ない」とっては、不安定な形となっていくたのである。このように、形容詞には、「ないければ」の支持基盤がなかったことも、打消の助動詞における「ないければ」から「なければ」への変化を促したのであろう。

七 おわりに

以上、江戸後期から明治初期にかけての作品を用いて、形容詞の条件表現について考察し、打消の助動詞「ない」の条件表現の変化との関係について考察してきた。その結果、形容詞の仮定条件表現が『七偏人』の頃、つまり、一八五〇年頃に「くは」「ければ」並用から「ければ」専用へと移り、形容詞の活用体系が再整備されたことが明らかとなった。また、打消の助動詞「ない」の「ないければ」から「なければ」への変化もこの形容詞における活用体系の再整備の影響を受けたものであることも明らかにした。今回の調査では「たら」を用いた仮定条件表現は見られなかった^{注17}ものの、現代日本語では「体調がよかつたら、出かけることができたのに」や「寝坊しなかつたら間に合ったのに」のように、形容詞や打消の助動詞「ない」の連用形に「たら」をつけて仮定条件をあらわすことが出来る。近世から近代における「たら」を含めた形容詞の仮定条件表現については別に論じることとする。

注1 小林賢次氏による一連の研究など。

注2 松村(一九五七)は、「主として五段活用の動詞には、この未然形に「ば」が付いて条件を示す言い方が残っている。」と指摘している。
(松村(一九七七)一三二頁、一七三頁)

注3 本稿では以下、「くは」は、「形容詞連用形十八」及びその融合同形を、「ければ」は、「形容詞已然形(仮定形)十バ」及びその融合同形を表す。

注4 奥村(一九九七)を参照されたい。

注5 松村(一九七七)一三四～一三五ページ

注6 小松(一九八二)五五二～五五四ページ

注7 吉川(一九七二)五二五ページ

注8 松村(一九五七)や小松(一九八二)のほかに、湯沢(一九五四)でも形容詞の仮定条件を表すのに「くは」と「ければ」の両形があったことを指摘している。また、坂梨(一九八二)では、上方語の例であるが、形容詞の仮定条件に「くは」と「ければ」の両方の用例を挙げている。

注9 表1には、「くは」の「は」が濁音である「クバ」、「クハ」の融合形である「カア」、漢文訓読みの「クンバ」も含む。また、「ければ」には融合形である「ケリヤ」「キヤ」も含む。

注10 表2には、「ないけりや」などの融合形も用例数に含まれている。

注11 本稿では、以下の作品を資料に用いた。(作品成立順。()内は成立年)

『浮世風呂』(文化六(一八〇九)年～文化十(一八一三)年) 日本古典文学大系

『四十八癖』(文化八(一八一一年)～文化十五(一八一八)年) 日本古典文学大系

『浮世床』(文化十(一八一三年)～文化十一(一八一四年)年) 新潮日本古典集成

『八笑人』(文政三(一八二〇)年～嘉永二(一八四九)年) 日本名著全集 日本古典文学大系

『春色梅児誉美』(天保三(一八三二年)年) 日本名著全集 日本古典文学大系

『春色辰巳園』(天保四(一八三三年)年) 日本名著全集 日本古典文学大系

『春色梅美婦禰』(天保二(一八四一年)年) 岩波文庫

『七偏人』(安政四(一八五七年)～文久三(一八六三年)年) 日本名著全集 江戸軟派全集

『春色江戸紫』(元治元(一八六四年)年) 岩波文庫

『西洋道中膝栗毛』(明治三(一八七〇)年～明治九(一八七六年)年) 岩波文庫

『安愚楽鍋』(明治四(一八七二)年〜明治五(一八七三)年)

明治文学全集

注12 表1、表2の用例数は、条件表現のみで、形態を同じくする並立用法は除く。並立用法は次のようなものである。

「銭金もなけりやア、情もねへのス」(『四十八癖』)

注13 奥村(一九九七)三八〜三九ページ

注14 奥村(一九九七)三九ページでも指摘している。

注15 『春色梅美婦襦』以前の「わるい」は三例見られ、全て「〜くは」で用いられていた。『七偏人』以降の「わるい」も三例見られたが、『七偏人』以降では、全て「〜ければ」で用いられていた。

注16 ただ、この形は洒落本に見られ、湯沢(一九五四)では「この種の用例はきわめて少なく、一般に用いられることはなかったようである」と指摘している(五七五ページ)。なお、湯沢(一九五四)にあげられている例は以下の通りである。

おめエさんの評判だつて、あんまり足が近ちかければ能くもなし
するからね

注17 金沢(一九九四)によると、上方語ではあるが、元治元(一八六四)年頃に版行されたと思われる『穴がしが心の内そと』に「形容詞+たら」の例が一例見られる。

おそかつたらおもてしめまめておくれなされ

参考文献

奥村彰悟(一九九六)「江戸語における「ないければ」―洒落本における

打消の助動詞を用いた条件表現―『筑波日本語研究』創刊号

筑波大学文芸・言語研究科 日本語学研究室

奥村彰悟(一九九七)「ないければ」から「なければ」へ―一九世紀に

おける打消の助動詞「ない」の仮定形―『日本語と日本文学』25

筑波大学国語国文学会

金沢裕之(一九九四)「明治大阪語の仮定表現」『国語と国文学』71―7

小林賢次(一九九六)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房

小松寿雄(一九八二)「近代の文法Ⅱ(江戸篇)」『講座国語史4 文法史』

第六章 大修館書店

阪倉篤義(一九五八)「条件表現の変遷」『国語学』33

坂梨隆三(一九七三)「江戸時代の打消表現について」『岡山大学法文学

部学術紀要』33

坂梨隆三(一九八二)「近代の文法Ⅱ(上方篇)」『講座国語史4 文法史』

第六章 大修館書店

坂梨隆三(一九九五)「打消の助動詞「ない」の発達」『人文科学科紀要』102

中村通夫(一九五九)「江戸語における打消の表現について」『中央大学

文学部紀要文学科』7

松村 明(一九五七)「近代の文法―江戸語から東京語へ―」『日本文法

講座 第三卷 文法史』明治書院 (松村(一九七七)『近代の

国語 江戸から現代へ』桜楓社 所収)

湯沢幸吉郎(一九五四)『江戸言葉の研究』明治書院

吉川泰雄(一九七二)「善くば」「為すば」などの濁音形について」『金

田一博士米寿記念論集』三省堂(『論集 日本語研究 一四

近世語』所収)

(一九九八年九月十日 受理)